

笹子城跡の概要

柴田龍司

1. はじめに

笹子城跡は、JR木更津駅の東方約6km、木更津市笹子に所在する。城跡は小櫃川左岸の標高70m前後を測る木更津丘陵から小櫃川に向かって北へ派生する支丘陵上に立地する。城跡北端から小櫃川までは約1.2kmの距離である。城跡の規模は、南北850m、東西400mを測り、千葉県内の中世城跡のなかでは大規模な部類にはいる。

この笹子城跡の北端部を、東関東自動車道千葉・富津線が建設されることになったため、(財)千葉県文化財センターで発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成3年4月から平成5年2月までで、調査面積は9,900㎡であった。また、発掘調査と並行して城跡全域の測量調査も実施した。

2. 笹子城跡の歴史

笹子城に関連する同時代の史料はいまのところ確認されておらず、後の時代の軍記や地誌に登場するだけである。なかでも、『群書類従』所収の「ささごおちのさうし」(註1)には、笹子城をめぐる攻防の記述が中心となっている。

それによれば、真里谷武田氏一族の武田信茂が笹子城主であったが、天文12年(1543)前後に一族間の内乱をきっかけに、外部の勢力である後北条氏や里見氏も加わって笹子城を舞台に二度合戦が行われ、いずれも笹子城は落城している。

真里谷武田氏は15世紀後半から16世紀中葉にかけて小櫃川流域を中心とした西上総地方一帯を領有していたが、天文3年(1534)～天文6年の内乱と天文7年における第一次国府台合戦の結果、当地域での勢力基盤はまったく消滅してしまったが、「ささごおちのさうし」のストーリーは、上記の天文年間の内乱をモデルにしているものと思われる。(註2)。

真里谷武田氏滅亡後の笹子城に関する歴史は伝承も含めてまったく不明であるが、唯一天保3年(1832)に著わされた旅日記(註3)に、「正木大

膳の城の跡」とみえ、近世末期には笹子城跡は里見氏の重臣であった正木氏が居城していた伝承が残されていた。

16世紀後半の当地域は敵対関係にあった里見氏と後北条氏の両勢力の境界にあったことから、該期において笹子城が機能していたとすれば、両者の勢力のどちらかが入っていたものと思われる。

3. 検出遺構(第2・3・4図)

発掘調査は、城跡北端部の城郭用語でいうところの「腰曲輪」とよばれる斜面途中にある平坦面を中心に9,900㎡実施したが、この面積は城跡全体からみればわずか1/30程に過ぎない。

調査区内には、調査前の段階で大小15か所の平坦面が認められたので、平場1～平場15の名称を付け調査を開始した。

以下、各平場ごとに検出された遺構について概要を述べるが、調査が終了したばかりの段階であるため、今後の整理作業の進捗によって遺構の性格や検出数の変更が予想されることを予めお断わりしておきたい。

平場1 城跡北半部では最高所で標高44mを測る。近世城郭の「本丸」に相当する部分である。現状で西側縁辺で高さ0.6mほどの土塁状の高まりが認められた。調査の結果20cm程の盛り土が認められたが、基本的には地山削り出しの構造であった。平場内からは遺構はまったく検出されず、わずかに中世遺物を40点程含んだ盛り土整地層が北縁部で認められたに過ぎない。もともと曲輪の縁辺部であったのか、それとも改変によって削平を受けたため遺構が検出されなかったものと思われる。おそらく、平場8で検出された堀跡の埋没状況(第4図)からみて後者の可能性が高い。

平場2・3 現状で平場2が17m、平場3が18.5mの標高を測り、下の水田面と平場2とは3mの比高差である。

調査の結果、軟質泥岩地山層の整形された段と、



堀A（上幅3.4m、深さ1.8m）を伴う盛り土整形によって造り出された面（平場2）の2時期の遺構面が検出された。盛り土層中からは中世の陶磁器が若干出土している。

平場4 調査区内に平坦面の端が若干かかっていたが、法面の関係から調査は実施しなかった。

平場5 標高24～25mを測る。裾部に沿って新旧2時期の空堀（B・C）が検出された。新期の空堀（B）は上幅5.6m、深さ1.8mを測り、断面形態は箱葉研状である。新旧の空堀は、ともに盛り土造成層に掘り込まれており、さらに両者とも人為的に埋め戻されていた。盛り土層は縁辺部で2mほど掘り下げたが地山層には達しなかった。

盛り土層中から、中国製の染付や青磁を含めて中世陶磁器が20点ほど出土している。

平場6・7 現状で平場6が標高32m、平場7が標高34mを測り、平場間では、2mの段差があった。調査の結果平場6と平場7は本来は一体の平場であったことが判明したので、ここでは一緒に記述することとする。なお、平場6は調査区内では最大の平坦面である。

検出された遺構は、空堀5条（堀D・E・F・G・H）、虎口3か所、竪穴状遺構5基、土坑240基、溝10条、ピット多数等である。各々の遺構は、盛り土整地層3面、地山整地層1面の計4時期にわたる面で検出されたが、地山整地層で検出された遺構の一部（特に堀H）は削平を受けている可能性があることから、自然地形面から掘り込まれたことも考えられる。そうとすれば I期＝上位盛り土整地層面、II期＝中位盛り土整地層面、III期＝下位盛り土整地層面、IV期＝地山整地面＋盛り土整地層面（縁辺部）、V期＝自然地形面、の5時期の変遷がとらえられる可能性がある。ただし、本論では調査が終了したばかりのため、空堀のような大形遺構でのみ時期分類を行っていることをお断わりしておきたい。

I期 堀Dが人為的に埋め戻され現状に近い地形となった段階で、調査区全域が城郭としての機能を停止した時期である。該期の遺構としては、土坑が若干検出されているに過ぎない。

II期 上幅10.5m、深さ4.3mと調査区内で検出された空堀のなかで最大規模を有する堀Dが機能していた時期である。堀Dは堀Eを人為的に埋め戻した後に掘り込んでいる。覆土の堆積状況は、

下部 $\frac{1}{3}$ ほどが人為堆積、中程が自然堆積、上部 $\frac{1}{3}$ ほどがふたたび人為堆積で埋め戻されている。上部人為堆積層と中部自然堆積層の境から、五輪塔や宝篋印塔が平場1から投げ込まれた状況で多量に出土している。

堀Dの外側には高さ1mの土塁が伴っていたが、堀Dが埋め戻されることによって平場7が形成されたこととなる。

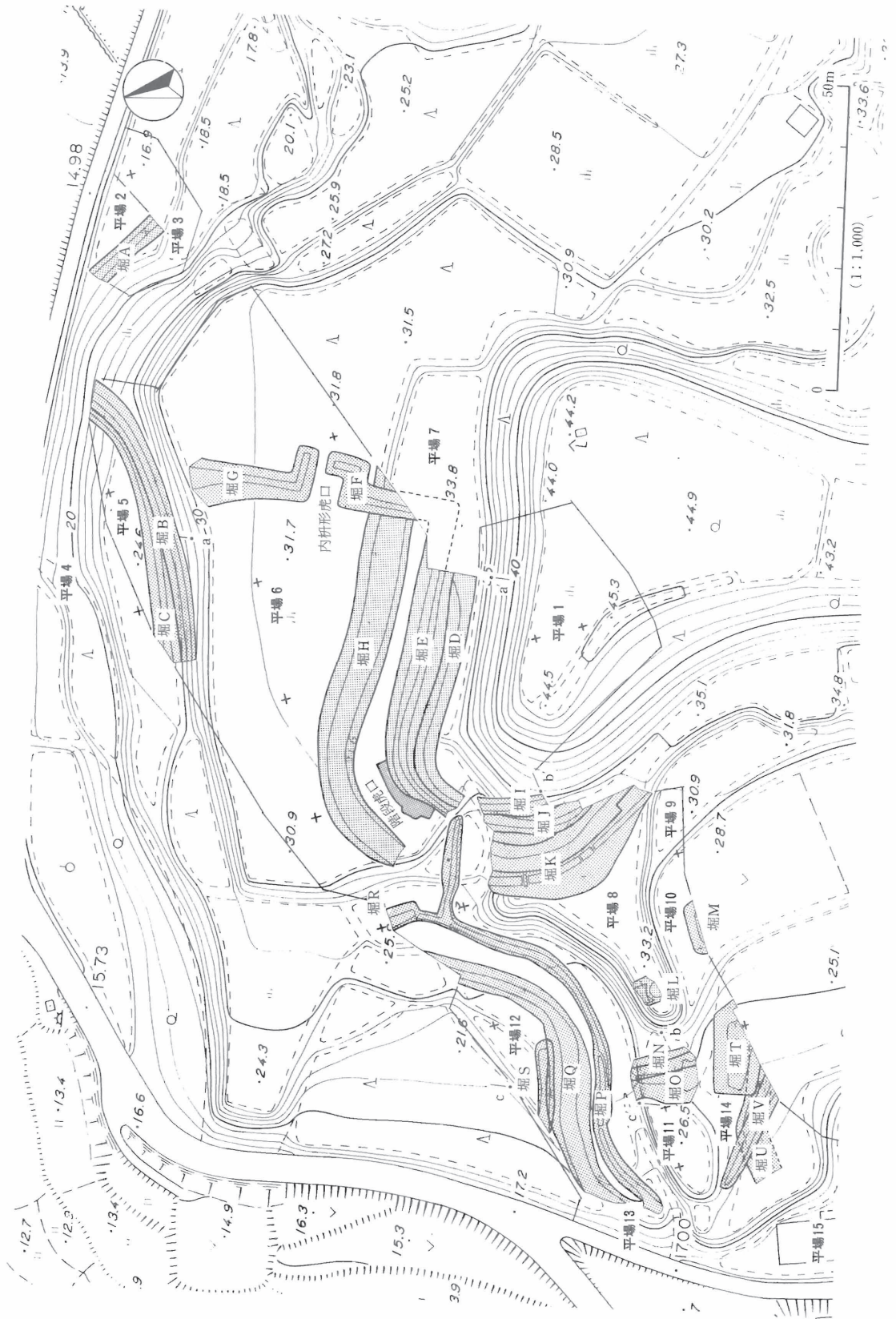
該期の遺構としては、後世の耕作による影響を受け遺存状況はよくないが、土坑やピットがいくつか検出されている。ただし、III・IV期と比べ遺構数は少ない。

III期 堀E・F・Gが機能していた時期である。堀Eは堀Dによって切られているため本来の上幅は不明であるが、深さは3mを測る。堀Eは西端部で壁面を斜めに上る階段状虎口と建て替えが認められる二脚門跡が検出された。平場12から平場6へ通ずる虎口である。また堀F・G間は掘り残され、横矢掛りの内枅形虎口をなしている。虎口内側には門柱と思われる径0.8m、深さ1.2mの大形のピットが2基認められた。

堀Fは堀Hを切って構築され、堀Eとの接合部は調査区外のため確認できなかったが、調査区端の土層観察で同一時期の所産と判明した。堀F・Gも共に人為的に埋め戻されていた。

IV期 堀Hが版築状に丁寧に埋め戻され、大規模な削平と縁辺部の盛り土によって広い平坦面が造り出された時期である。竪穴状遺構を始め、土坑、ピット等が多く検出され、III期と同様日常空間としての機能が強い段階である。該期においては、いまのところ堀は伴っていなかったと考えている。

V期 IV期の縁辺部盛り土層の下で弥生時代中期の土器を包含する緩斜面堆積の黒色土層を検出したが、この層を築城時階段の表土層と捉えた。後のIV期における大規模な削平によって、該期の確実な遺構は破壊され残されていないが、堀Hが上幅は8mあるが、深さがわずかに1.2mしかなく、IV期に削平を受けた可能性があることから、堀Hは管子城がまだ多分に自然地形を生かして築城された段階に伴うものと判断した。また後述する平場12で検出された空堀のうち、最も古い堀（堀S）が自然地形である黒色土層から掘り込んでいることも考慮した。



第2図 検出堀跡位置図



第3図 平場6・7全測図(堀は除く)

出土遺物は、中国製染付・白磁・青磁、国産の瀬戸・美濃、常滑等の陶磁器、カワラケ、中国銭などの中世遺物だけで3000点ほど出土している。

平場8 現状で標高34mを測る。検出された遺構は空堀4条（堀I・J・K・L）、土坑53基、溝3条、ピット129基等である。各々の遺構は6時期にわたる面で検出された。

I期 平場8で検出された空堀5条のうち、最も新しい堀Iが人為的に埋め戻された時期で、現状に近い地形の段階で城郭としての機能は停止していた。該期の遺構は認められなかった。平場6・7のI期に相当する。

II期 新期上位盛り土整地層面で、上幅4m、深さ3.5mの堀Iが機能していた時期である。堀Iは最終的に埋め戻された堀Jを切って掘り込まれている。該期のその他の遺構は認められない。平場6・7のII期に相当するか。

III期 古期上位盛り土整地層面で、推定上幅7m、深さ2.8mの堀Jが機能していた時期。堀Iと掘り込み面は同レベルで、伴出遺構も認められないことからII期より若干古い時期と思われる。平場6・7のII期からIII期に相当するであろう。

IV期 中位盛り土整地層面で、空堀は伴わないが、土坑やピットおよび遺物を多数伴う時期である。日常性の強い空間として機能していたようである。平場6・7のIII期かIV期に相当する。

V期 堀Kを版築状に丁寧に埋め戻し平坦化した面（下位盛り土整地層面）と地山整地層面の段階で、IV期同様遺構・遺物とも多く検出され、堀を伴わないことから、日常性の強い空間として機能していた。平場6・7のIV期に相当するか。

VI期 堀Kが機能していた時期。堀Kの西側地山面と現表土面との厚さがあまりないため、地山面で検出された遺構群が伴うかどうかは不明である。また同じ理由で堀Lも同様である。ただ、堀Lは上幅5m、深さ1.3mを測り、北端部に削り残しの土橋状の高まりが認められるものの、長さがわずか3.2mしかなく、平場10側から削り落とされている可能性があることから、平場8ではかなり古い段階に伴うものであったと思われる。

堀Kの堀底には、幅0.8m、高さ0.7mと幅2.8m、高さ0.2mの土橋状の高まりが2か所認められた。

平場6と平場8では高低差があり、しかも平場12で検出された堀Pが間に入り込んでいるため、

堀Eと堀Kとの同時期あるいは新旧の関係は直接捉えることはできないが、各々の堀の方向を平面的にみると関連性が強くうかがわれる。さらに、両方とも版築状に丁寧に埋め戻されている点で共通性があることから、堀Eと堀Kは同時期に機能していた可能性がある。ただ、逆に堀Eは上幅に比べ浅いことから削平を受けている可能性があるが、堀Kは削平を受けた可能性はなく、また平場8に旧表土層である黒色土層がまったく認められず、堀Kが機能していた段階ですでに大規模な改築を受けていたと思われる点では逆に同時期の可能性はない。

ここでは、平場8のVI期を平場6・7のIV期あるいはV期に相当するものとしておく。

出土遺物は、中国製磁器、国産陶器、カワラケ、中国銭、土錘等、調査面積が狭い割には約1500点と多く出土している。

平場9 現状で標高31mを測る。平坦面の端部の調査であったため、地山整地面と盛り土整地層面が捉えられたに過ぎず、伴出する中世遺物もわずか6点であった。

平場10 現状で標高29mを測る。平場9と同様大きく盛り土整地層面と地山整地面の2時期の面が検出された。盛り土整地層面からは、径2.4m、深さ2mの素掘りの井戸跡1基、土坑7基、溝3条が検出された。地山整地面では調査区端で堀の端部（堀M）が検出された。深さ2m以上で人為的に埋め戻されていた。

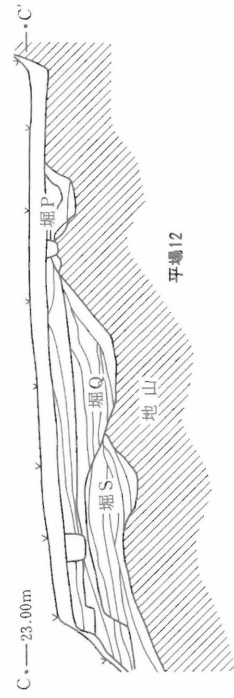
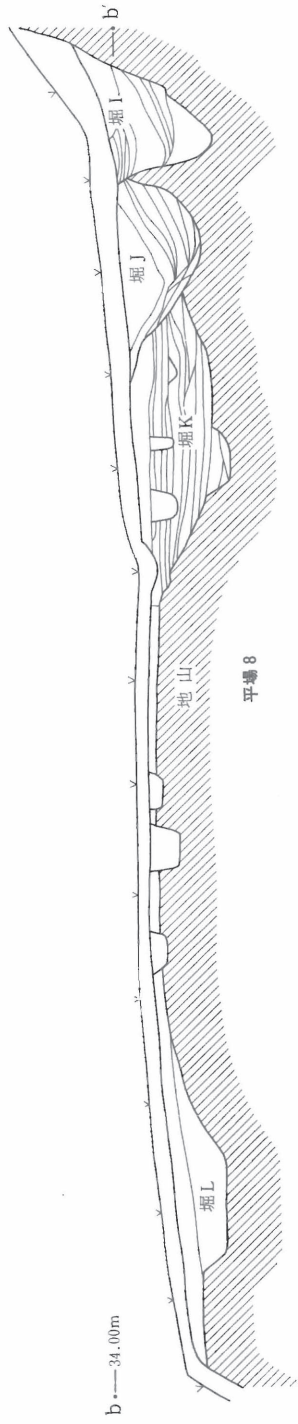
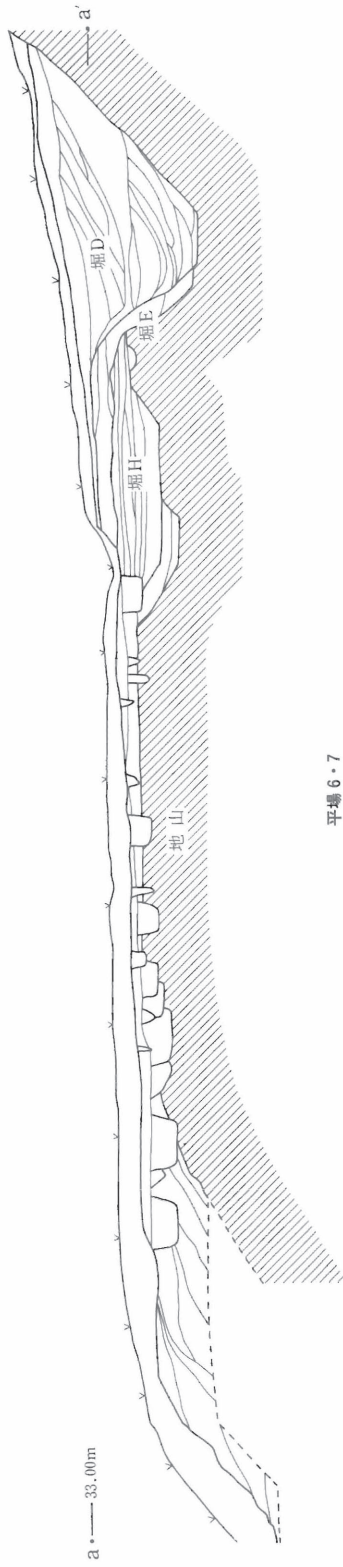
遺物は主に盛り土層中から出土し、約200点出土している。また炭化した種子ブロックが見つかった。

平場11 現状で標高26.5mを測る。全体に地山削り出し整地で、基部側で新旧関係を有する空堀2条（堀N・O）が認められた他は、平坦面ではまったく遺構が検出されなかった。

堀Nは堀Oを切って掘り込まれており、上幅7m、深さ1.8mを測る。最終的には人為的に埋め戻されていた。堀Oもやはり人為的に埋め戻されていたが、埋め戻し方が不完全であったため、調査区内において現状観察で唯一堀の痕跡が認められたものである。

出土遺物は、堀の覆土内を中心に約30点の中世遺物が出土した。

平場12・13 現状で平場12が標高24m、平場13



第4図 平場土層断面図

が標高23mと明瞭に段差が認められたが、調査の結果本来は一体のものであったことが判明したので一緒に記述することとする。

検出遺構は空堀4条(堀P・Q・R・S)、土坑11基、溝2条、ピット等で、検出面は大きく3時期に区分される。

I期 堀P・Qが人為的に埋め戻され、平場12と平場13が形成された時期で、堀Qの覆土も含めて盛り土整地層面から土坑が10基ほど掘り込まれていた。平場11の下に近年まで使用されていた農作業用の小径が認められるが、該期にも使用されていたものと思われる。

II期 堀P・Q・Rが機能していた時期。堀Pと堀Qは土層断面観察で新旧関係の有無を捉えることができなかったが、平面的には併走していることから同一時期に機能していると捉えた。

堀Pは東半部では上幅1.8m、深さ1mと堀というより溝に近いが、西半部で上幅2.5m、深さ1.5mになり、堀として十分機能する規模となる。西側に開口しているため、堀底を利用した通路であった可能性がある。さらに、ここは裾部からの湧水が多いことから、排水路としても使われていたものと思われる。東側は北と堀D・Iが開口するところへと分岐する。北へ伸びる方は上幅3.5m、深さ1.2mの堀Rへとつながる。

堀Qは上幅6.5m、深さ2mを測り、外側の肩部は一部堀Sを埋めた層となっている。

III期 緩斜面の黒色土層(旧表土層)から掘り込まれた堀Sが機能していた時期。堀Sは堀Qを築くときに施された厚い盛り土層によって埋め戻されていたため、当時の形態を留めて検出された。緩斜面に掘り込まれているため、上幅3.5m、深さは0.5m~1.2mを測る。その他の該期の遺構は検出されていない。

出土遺物は、中世陶磁器とカワラケで約300点出土している。また堀Pの底部近くから木製品と加工材、および東端部に限定されるが五輪塔・宝篋印塔の一部が5個出土している。

石塔類が出土する堀は他に堀Dに限られることから、堀Pと堀Dは同一時期に機能した可能性が強い。

平場14 現状で標高24mを測る。現地表下約1.2mで宝永4年(1707)に噴火した富士山の火山灰層が検出されたことから、近世に入って屋敷地造

成のためはかなり手を入れていることが判明した。

火山灰層より下は中世の盛り土整地層であったが、この面では遺構はまったく検出されなかった。盛り土整地層面下では、他の平場と同様に各々切り合い関係を有する空堀が3条(堀T・U・V)検出された。堀Tは堀Uを切って掘り込まれており、上幅7m、深さ2.2mを有するが、全長15mで両端は立ち上るため、調査区外で屈曲するものと思われる。堀Uは堀Vによって外側の肩部が切られているため、上幅は推定3m、深さ1.5m、堀Vは上幅2.5m、深さ1.8m、各々測る。

出土遺物は盛り土層中層を主に、若干の堀底直上を含めて100点ほどの中世遺物がみられた。

なお、標高19.5mラインで水平に堆積する黒色土層が検出されたが、この黒色土層が当時城外となる地表面であったものと考えられる。

平場15 現状で標高17.5m、隣接する水田面との比高差2.5mを測り、調査区内では平場2について低位の平坦面であった。

現表土下約1mで近世後期の土坑1基と多量の陶磁器を検出したが、その下を最大2.5mほど掘り下げたが、濃緑青色の砂質粘土層が続くだけであった。中世の段階では平場15のレベル面は深田のような状況であったと思われる。

4. 出土遺物

ここでは、調査全体からみた記述をすることとする。城郭に伴う中世遺物は、総出土遺物数の80%ほどを調べた段階で約6000点出土している。そのうち中国製の磁器と国産陶器だけで1768点である。この数値は、いままでに県内で実施された中世城館跡の発掘調査例の中では最も多い(註4)。いままでに最も出土量が多かった城跡は、笹子城跡と密接な関連があった真里谷城跡で、総数2843点(カワラケ1600、常滑294、瀬戸・美濃93、中国陶磁856)であった(註5)。無論笹子城跡の調査面積自体が大規模であったことも出土点数に反映しているが。

ところで、近年精緻な編年が提示され、遺跡の年代を捉えることができる瀬戸・美濃窯製品と中国製磁器から笹子城の存続年代をみてみたい。

瀬戸・美濃窯 器種としては、灰釉小皿が33%、錆釉播鉢が59%と、両者で全体の92%を占める。他に天目釉碗、鉄釉小皿、灰釉碗、灰釉香炉など

		平場1	平場6・7	平場8	平場9	平場10	平場11	平場12・13	平場14	平場15	計	
中 国	青磁	碗	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
		皿	1	56	12	0	2	0	8	0	0	79
		盤	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
		計	1	58	12	0	2	1	8	0	0	82
	白磁	碗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		皿	7	21	24	0	2	1	1	1	0	57
		坏	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
		計	7	22	25	0	2	1	1	1	0	59
	染付	碗	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
		皿	20	47	15	0	0	1	2	0	0	85
		計	20	48	16	0	0	1	2	0	0	87
		茶入	0	3	0	0	1	0	0	0	0	4
中国品合計		28	131	53	0	5	3	11	1	0	232	
国 産	瀬戸・ 美濃	灰釉皿	5	219	121	0	33	2	24	3	1	408
		〃 卸皿	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
		〃 碗	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
		〃 香炉	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
		〃 その他	0	12	5	1	1	0	0	0	0	19
		天目茶碗	0	13	7	0	2	0	0	0	0	22
		鉄釉皿	1	11	4	0	0	0	1	0	0	17
		茶入	0	0	1	2	0	0	0	0	0	3
		その他	0	13	0	1	1	0	7	0	0	22
		錆釉搦鉢	9	390	148	1	21	11	84	63	1	728
	瀬戸・美濃合計		16	666	286	5	58	13	116	66	2	1,228
常滑系甕		2	108	65	1	35	17	63	16	1	308	
国産品合計		18	774	351	6	93	30	179	82	3	1,536	
総計		46	905	404	6	98	33	190	83	3	1,768	
<p>註 破片数は出土総数の80%程度階の点数 接合作業はほとんど実施していない 土師質土器（カワラケ）、瓦質土器等は含まれない</p>												

第1表 笹子城跡出土陶磁器破片数

が若干認められるだけである。

藤沢良祐氏の編年（註6）によれば、灰釉・鉄釉小皿と天目釉碗の大部分は古瀬戸後期様式Ⅳ期に属し、若干大窯Ⅰ期、さらに少量であるが大窯Ⅱ期（古）のものが含まれる。錆釉播鉢は古瀬戸後期ではⅡ類、大窯ではⅠ類に限られるが、古瀬戸後期Ⅳ期（新）と大窯Ⅰ期のものが半々の割合で認められる。それと、若干ではあるが大窯Ⅱ期（古）段階のものが認められる。

小皿類と播鉢をみると、全体的には古瀬戸後期Ⅳ期の製品が最も多く、次に大窯Ⅰ期の製品が続く。大窯Ⅱ期の製品は、全体でも20点認められるかどうかの点数である。

主体を占める後期Ⅳ期の前段階の製品としては、後期様式前半の灰釉香炉と瓶子の特殊な器種が認められるだけである。後段階の製品には初山窯と思われる小皿、織部釉向付が各一点平場12の表土層下部から出土している。

以上、瀬戸・美濃窯製品を中心に形式ごとにおおよその出土傾向についてふれてきたが、古瀬戸後期Ⅳ期が1440年～1485年、大窯Ⅰ期が1485年～1520年、大窯Ⅱ期が1520年～1550年を中心とした年代が与えられていることから、瀬戸・美濃窯製品からみた笹子城の存続年代は15世紀第3四半期から16世紀第1四半期を中心をなし、若干ながらも大窯Ⅱ期の製品が認められることから16世紀中葉までは存続していたものと思われる。ただ、16世紀中葉以降の製品がいまのところ遺構面に伴って出土していないことから、調査区内においては城郭としては機能していなかったようである。

中国製磁器

白磁、青磁、染付が主体を占める。白磁はD群の割高台の小皿とC群の端反皿が大部分である。青磁は腰折れの稜花皿が圧倒的に多く、蓮弁・無文の碗はごくわずかに出土しているに過ぎない。染付は皿B群の端反皿と皿C群の碁笥底の皿が主体を占め、若干碗C群が認められる。

それぞれの年代観は、白磁D群の割高台の小皿が15世紀前葉～中葉に中心をおく他は、いずれも15世紀後葉～16世紀前葉の年代が与えられており（註7）、おおよそ、瀬戸・美濃窯製品の年代と同様な結果となった。

なお、珍しい器種として朱泥色に近い胎土の茄子型および肩衝の茶入片が4個体分出土している。

陶磁器以外の遺物

カワラケ 出土遺物のなかでは最も多く出土している。大部分は細片の状態で盛り土整地層中から出土しているが、少数ながら盛り土整地層から完形で出土する場合もみられた。なかには、6枚や8枚重ねの例もあった。完形および細片も含めて灯明皿に使用された例は極めて少なかった。

石製品 五輪塔および宝篋印塔、石臼、砥石、硯、水晶製ミニチュア五輪塔などが出土している。石塔類の大部分は堀Dの覆土内からの出土である。水晶製五輪塔は舍利容器として使われたもので、蓋にあたる空風部は残念ながらみつからなかった。火水地部で高さ3.3cm、火地部が六角形をなす。平場8のⅣ期あるいはⅤ期にあたる盛り土整地層中から出土した。県内では初めての出土例である。

金属製品 銭貨、小刀、独鈷杵、鉄鍋、釘などが出土している。銭貨は判読した限り中国銭のみで永樂通宝が含まれる。独鈷杵と鉄鍋はいずれも完形で、独鈷杵は長さ15.2cm、鉄鍋は口径36cm、高さ19cmを測り、平場6のⅢ期にあたる面から近接して出土した。さらに、瓦質香炉が脚部のみ欠損の状態と同じ面からやはり近接して出土していることを考えると、これらの遺物は地鎮に伴う遺物群と思われる。

木製品 漆器椀、把手、加工材、杭などが出土しているが、出土地点は平場10の井戸跡と平場12の堀Pに限られ、量的にも少ない。

5 まとめ

調査面積9,900㎡が、笹子城跡全域からみればわずかに1/30の面積、過去における中世城跡の発掘例の数々と比べればトップクラスの大規模発掘となり、果して笹子城跡の調査区内での成果が、中世城跡研究の上でどれ程普遍化できるのか、現在の研究水準でははっきりしないが、以下、調査で得られた成果をまとめ、現時点で考えられる点について述べてみたい。

まず検出遺構からみた共通性や特異性についてみてみたい。

1. 空堀は計22条検出されたが、すべて改築時あるいは廃城時に人為的に埋め戻されていた。このため、調査前段階では埋め戻し方が不完全だった堀Oを除いて全く痕跡すら認めることができなかった。

2. 22条（堀F・GとP・Qを一体のものとするば20条）の空堀のうち、堀L・M・P・Q以外の堀は新旧関係を有している。特に堀BとC、DとE、IとJは若干ずらして前代の堀と同一方向に新たに掘り直していた。しかも、常に奥側に掘られていた。このことは、斜面部も一緒に削られている可能性がある。

3. 築城後、最初の大改築以後は基本的には盛り土造成を伴いながら改築されていった。

平場6と平場8では遺構検出面が3～4面確認された。また、ある時期平場内に堀が存在しなかった可能性がある（平場6＝IV期、平場8＝IV・V期）

4. 平場6と平場12では、築城前の表土層が検出され、特に平場12での旧表土層上から掘り込まれた堀Sの状況から、築城時の笹子城はかなり自然地形を残していた様相が窺える。

5. 現在の水田面にレベル的に最も近い平場のうち、平場2は中世に造成され、平場17は近世後期に造成されたことが明らかとなった。

6. 平場6で、内柵形状虎口と階段を伴う虎口が、ともに二脚の門柱を伴って検出された。前者は堀F・Gに、後者は堀Eに関連し、III期の遺構である。

7. 柱穴を伴う竪穴状遺構が計5基検出されたが、すべて平場6で、しかも1基が若干離れるが、他は限定された場所で切り合い関係を有しながら検出された。竪穴が掘られる場所は、広い平場6内でもほぼ限られていたようである。

8. 調査区内で最高所である平場1が大規模に削平を受けたためか遺構は全く検出されず性格は不明であるが、2番目および3番目に高所の平場6・7と平場8は日常生活空間としての性格が強い時期が認められた。しかし、それよりも低位の平場では日常生活空間としては利用されなかった。

9. 最も検出数の多かった土坑（様々のプラン、規模があるが）は、若干骨粉や銭貨が何枚か重なって出土し土坑墓と判明したものもあるが、大部分は無遺物のため性格は不明であった。

10. 平場6・7と平場8は、平場内における変遷がほぼ共通することと、平場6・7の堀D・Eと平場8の堀I・J、および平場6・7の堀Fと平場8の堀Kが、平面的にみると一連の堀として捉えられることから、平場6・7と平場8は常に改

築は連動して行われたことが考えられる。

次に出土遺物からみた特色についてみてみたい。

11. 出土遺物の点数が、過去に実施された県内の中世城館跡の調査と比べ最も多量に出土した。

12. 日常雑器である陶磁器の年代をみると、若干15世紀前半まで遡る一群がある他は、15世紀後半から16世紀前半の時期に限定され、調査区内における笹子城は16世紀中葉には既に廃城になっていたものと考えられる。

13. 中世遺跡の調査で全国的にみても極めて珍しい遺物として、水晶製ミニチュア五輪塔、独鈷杵、完形の鉄鍋、中国製茶入が出土している。いずれも県内では初めての出土例である。

14. 出土陶磁器の器種をみると、中国製、国産品共に大部分が皿類であり、碗類の割合は極めて低い。

15. 五輪塔や宝篋印塔の部材が多量に出土した。大部分は平場6・7の堀Dで平場1から投げ込まれた状態で出土している。

以上、調査成果の特色を長々と羅列したが、改めていくつかの項目にしぼって検討してみたい。

まず、検出された堀22条がすべて人為的に埋め戻されていることであるが、改築時における埋め戻しは当然としても、最終時の堀もすべて埋め戻されていたことは、埋め戻し後の遺構・遺物が極めて少ないことを考えると、廃城のための行為であった可能性が高い。堀Dから多量に石塔類が出土したことは、笹子城とは敵対関係にあった勢力による行為であったものと思われる（註8）。廃城行為は従来戦国時代末期から近世初頭の行為と捉えがちであったが、16世紀中葉にも実施されていたことが明らかになった点は重要である。おそらく戦国期には廃城行為は普遍的に行われていたものと思われる。

では、誰が廃城行為を行なったかという点については、笹子城の存続年代が15世紀後半～16世紀前半で、ほぼ真里谷武田氏の存続と軸を一にしていることから、伝承通り真里谷武田氏関係の城であったが、武田氏の滅亡後当地域に進出した後北条氏あるいは里見氏の勢力によって実施された可能性が高い。

次に、笹子城は築城時－改築時－最終時と大きく3段階の形態を経て廃城に至ったが、特に平場6・7と平場8で明らかになったごとく、堀を埋

め立てると共に平場を造り出し、居住性の強い空間を設けている。その時期には堀を伴っていなかった可能性も考えられる。

築城時と最終時には確実に堀を伴い、しかも最終時に伴う遺構は極端に減少（築城時の遺構は改築時の削平で不明）することから、平場6・7・8においては、防御性の強い空間→居住性の強い空間→防御性の強い空間と、平場の機能が2度にわたって大きく変化している。

これらの変化は、①真里谷武田氏が外部から西上総に入部し、周辺の在地勢力と緊張状態にあった段階、②真里谷武田氏が西上総において安定した権力基盤を保持していた段階、③天文の内乱から第一次国府台合戦にかけての、真里谷武田氏の衰亡期の段階、の各三つの段階にほぼ相当するのではないだろう。

中世城郭といえども、その時々時代の背景によって、軍事性が強いものであったり、居住性が強いものであったりと、短期間のうちに機能が変化するものであったといえるであろう。

ところで、いままでは発掘調査を実施した部分の成果についてののみふれてきたが、最後に発掘をしていない部分について目を向けてみることにしたい。

全域の測量調査で明らかのように、笹子城跡の中央やや北寄りのところから城跡南端部までに現在も堀切や横堀が何本も明瞭に認められる。調査区も含めた北半部では現状でほとんど堀を認めることができないことは好対称である。

北半部に現状で堀がほとんど認められないことが、発掘成果で明らかになったように、本来は堀が無数に掘られていたのを人為的に埋め戻された結果とすれば、現状で堀が認められる南半部は、①北半部とは別の城郭、②北半部と一体の城郭であったが、南半部は堀が埋め戻されなかった、③北半部にあった城郭を攻めるための陣城、と3通りの解釈が考えられる。

南半部はいままで発掘調査の手はまったく入っていないため、北半部の発掘成果との直接的な対比はできないが、現状の縄張りをみる限り、南半部中央の主郭部北に馬出し状の曲輪が認められることと、発掘で検出された堀と比べ相対的に規模が大きいことから、南半部は北半部より新しい縄張りと思われる。

そうとすれば、北半部が16世紀中葉に真里谷武田氏の滅亡と共に破却され廃城となったが、替って当地域に進出した勢力（里見氏系か後北条氏系）によって南側に新たに城郭を築いたか、従来の城郭の南半部のみを改築し再利用したものと考えられることができるであろう。

笹子城跡は、考古学研究によって現状からは全く想像出来ない成果が数多く得られた。しかし長期間の調査ではあったが、城跡全体からみればわずかに1/30程発掘したに過ぎず、考古学の成果だけで笹子城跡を語ることは不可能である。今回の調査で端的に表わされた考古学研究と縄張り研究の長所・短所を見据えて笹子城跡の研究は進められなければならないであろう。

最後に、調査中に様々な御指導・御助言をいただいた村田修三・小野正敏・藤沢良祐各氏をはじめ多くの方々に感謝する次第です。

註

- 1 「ささごおちのさうし」『群書類従』卷第三百八十六 合戦部十八
「ささごおちのさうし」には天正15年（1587）の奥書があるが、記述内容からみて近世に入って書かれたものと思われる。
- 2 小笠原長和「『笹子落草子』にみる戦国の映像—上総武田氏とその内争—」『中世房総の政治と文化』吉川弘文館 1985
- 3 西野元 「校註 上総日記」『歴史人類』第17号 筑波大学歴史・人類学系 1989
- 4 千葉城郭研究会編 『千葉城郭研究』第1号・第2号 1989・1992
- 5 牛房茂行他 『真里谷城跡』木更津市教育委員会
- 6 藤沢良祐 「瀬戸大塚発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986
藤沢良祐 「古瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X 1991
- 7 小野正敏 「出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.416 東京国立博物館 1985
- 8 柴田龍司 「堀跡や曲輪から出土する石塔」『中世城郭研究』第6号 中世城郭研究会1992